

黒川文庫蔵『大和物語鈔』解題

山崎正伸

上野英子

一 はじめに

大和物語の注釈書として、承応二年（一六五二）に初公刊された北村季吟の『大和物語抄』（別称拾穂抄。以後混乱を避けるため、拾穂抄と略）はその奥に

…今このひか心得とをかきしるし侍るに。かくふかきことはのほかの心をしらぬはいふもさらなり。まのあたりの事に筆をさしをき侍所々。あまたといふはかり侍れと。よしかゝるあらまし事たに。いま、て此ものかたりに侍らねは。わがとちのをろものは。かくあたらしきふる事をしも。見しるましきかくちおしきわさ成ければ。身におはぬ事のつみをもかへりみすかつ物くるおしきをこ事をさへ申つゝけて侍りけり。…（※傍線稿者。以下同様）

として、先行注釈書を求め得なかつた旨を記している。これを承けてであろうか、安永五年（一七七六）に成立した『大

和物語虚静抄』で木崎雅興は

…此物語にも先哲の抄物なくやはあるべきなれども、ふかく函底にひめをくにや、いまだ見出侍らず。纔に北村氏の一抄ありて世に伝へり。彼抄のおくに、かゝるあらまし事だに、此物語に侍らねばと有。彼作者もいまだ見及ばざるよしなれば、彼抄の外には、世に流布する物なきにやあらむ。…

と述べている。こうした流れをくんで、従来、大和物語の注釈書は、勘物を除けば、拾穂抄が嚆矢とされてきたようである。

ところが、昭和三八年、今井源衛氏が「山鹿素行手沢本『大和物語抄』に就いて」（『語文研究』一六号）で、山鹿光世氏所蔵『大和物語抄』の零本を紹介。同書こそは拾穂抄に先行する、中世の古注『大和物語鈔』（以後『鈔』と略）であると論じられ、さらに「古注『大和物語鈔』考」（昭和四五年角川書店刊『王朝文学の研究』所収）において、素行手沢本の残部大半が現存したこと、またこれと同系統の完本三部が他に存在することを知ったとして、高橋正治氏蔵本・内閣文庫本・国立国会図書館本を紹介、これらを詳細に分析された。

今井氏の研究を契機として、その後『鈔』諸本の実態が次第に明らかになってゆく。すなわち、昭和四八年に高橋正治氏が架蔵本『鈔』の影印を（私家版『大和物語の研究 古注本影印篇』）、昭和五四年には高橋貞一氏が賀茂季鷹本『鈔』の翻刻を（古典文庫三九四『大和物語抄』）、平成四年には柳田忠則氏が日本大学総合図書館蔵本を紹介された（『日本大学総合図書館蔵 大和物語鈔について』中古文学五〇号）。このうち、柳田氏によって新たに紹介された日大本には、書写成立の経緯を記したと思われる奥書がついており、『鈔』そのものの流传を考察するうえでも興味深い。同奥書によれば

抄出の事、去ぬる年の秋、横山山城守長知、此物語よめとのたまふ。たゝと申。そのかみ、江沼の温泉にてつれく

のほとにとあれば、いにし慶長の頃、綴喜禪門一覚といふ人、久世の幽閑にいまし、まうてき、し其説もてよみ侍る事、繁し、抄せよ、とあるを、いなみかたく、一覚老師の本は、むかし佐渡守親賢か子美濃權守入道勝命之かかきしうつしにて、勘物多く、他本よりはおさく段もこと葉もすくなし。其勘物を段の末にかき、師にき、しま、に草し、冬、中書なして奉り、重て田丸西位所持本の奥に、勝命以進上本密々書写す、とあるを請、すこしきにかはれる所を、かたはらに付て、ことし、令書写、長知に奉る也。愚てつたなきま、に、こと多く抄す。あやまりをあはれみ、た、し給へ

寛永十年癸酉夏五月十八日

旅人葉雪

横山山城守殿

(※句読点稿者)

とあり、①慶長年間(一五九六―一六一四)、葉雪が綴喜禪門一覚という老人から大和物語の講釈をうけたこと。②寛永九年(一六三二)、葉雪は横山山城守長知の命により大和物語の講釈をしたこと。その際、一覚老師の説を用いたこと。③長知よりダイジェストを作成せよという命をうけ、冬に中書して進上したこと。④その際、勘物(勝命自筆本の転写本で勘物が多く、他本よりは段も言葉も少ない一覚老師本の勘物を利用した)を各章段の末にかき、師に聞いたまま注釈を草したこと。⑤その後勝命が進上本をもって密々書写したという田丸西位所持本を借り、異同を傍書し、清書させ、寛永十年五月に改めて長知に進上したこと、等の経緯が語られている。

この奥書が日大本のみに係わるものなのか、『鈔』自体の成立にまで係わるのか、という問題については説の分かれるところであろうが、初めて具体的な年号が示されたという点で、極めて貴重な資料といえるだろう。

そして今回、実践女子大学図書館黒川文庫蔵本のなかにも、同じく『鈔』の一本と思われる写本を確認した。しかもこの本は他の『鈔』とは書式を大いに異にし、物語本文も注の本文も独特である。

今井論文が発表されるまでは、いみじくも木崎雅興が「抄の外には、世に流布する物なきにやあらむ」と評したごとく、最も早く公刊され、世に喧伝されたのは『拾穂抄』であった。そういう意味では、『鈔』は『拾穂抄』とは別のところで、いわばその傍流としてひっそりと命脈をつないできたかにみえる。しかし黒川本を読み解いてゆくと、『鈔』には『鈔』なりの、芳醇な享受の事実があったことが窺えるようである。このことは、単に『鈔』の享受史のみならず、広く大和物語の享受史を考察するうえでも意義あるものといえるのではあるまいか。本稿では黒川本に関する調査結果を報告するが、文芸資料研究所の「別冊年報」V・VIに翻刻を掲載したので、併せてご参照いただければ幸いである。

二 書誌

〔冊数・装丁〕 写本一冊。袋綴（五孔・後綴白糸）。

〔表紙〕 香色無地後修（裏打ち補修）紙表紙。表紙寸法二八、四×二〇、〇糎。表紙左肩に「大和物語鈔」、右下端に「十七」と墨書（同筆か）。また表紙右肩に黒川文庫の分類印「物語」（単辺朱丸印）を捺す。

〔本文料紙〕 前後見返しとも白紙。本文料紙斐紙。墨付き本文九十六丁。第一紙目には料簡めいた書き入れ注が付加されるが、この注は『鈔』諸本には全く見られないものである。後遊紙一丁。

〔書式〕 本論部分は、各丁、上欄に余白を残して四周単辺（内郭一八、三×一四、六糎）の匡郭をひき、匡郭外（主として上欄余白）に頭注を、匡郭内に物語本文と行間注を記す。『鈔』諸本では各章段の文末に一括してまとめられている。た『鈔』の注記を、黒川本は、頭注と行間注とに分散させて記述したようである。この書式もまた異色。

〔物語本文〕 物語本文は章段があらたまる毎に、改行して書き起こす形式をとる。但し段序を示す数詞は無い。片面十一

行、一行二十二字内外。和歌独立書き（改行二字下げ二行分かち書き）。

「書き入れ」物語本文の書写が終了した後に加えられたと解される書き入れに、まず各段冒頭に付された朱筆による鉤点と、朱あるいは墨筆で書き入れられた「並び」の肩付きがある。改行しなかった（換言すれば、書写段階ではそこから新たな章段が始まると認定しなかった）本文の肩に、朱の鉤点が付けられたり、朱墨両筆による「並」が書き入れられた箇所があるからである。

また朱引や朱の句点・朱墨両筆の清濁記号等がある。句点は色合いを異にした朱筆が用いられ、色合いによって句点の打ち方に若干の相違がみられ、清濁点も同一箇所両用の記号が振られた箇所がある。これらの書き入れが一度だけではすまなかった証であろう。

さらには朱墨両筆による異文注記や本文訂正がある。異文注記のなかには「判本二八」という注記もあることから、底本以外の本文を参照していたことが窺われる。

〔注記〕注記には、匡郭内の物語本文行間に記されたものと、匡郭外の頭注に記されたものがある。注記の種類は、振り漢字・振り仮名をはじめとして、語釈・文脈解説・勘物・出典・有職故実等多数。『鈔』の注記を継承したものもあれば、全く独自の注もあり、後者のなかには本行書写者以外の筆も複数。また「吉源釈」や「垣斎説」などといった講釈の聞きめいた記述もある。

注記にも、朱墨両筆での書き入れ訂正や諸記号（鉤点・訓点・朱引・清濁など）が加わる。朱墨の先後関係は、朱書を墨筆で訂正したり、その逆もあつたりで特定しないが、朱筆の全く加わらない独自注も散見することから、最後に加えられたのは墨筆による注記であつたことが窺われる。

〔識語〕識語「釈案所持」（本文最終丁裏）。人物未詳。「写」ではなく「所持」と明記するところを見るに、この人物は該

書を書写し作成した人物ではなく、その後の所有者ということになるのだろう。尤も該書書き入れ注記の一部に、この識語と類似した筆跡のものがある。所有したのみならず、一部注を書き入れたものか。

〔藏書印〕墨付き本文二丁表に、「黒川真頼藏書」（単辺朱長方印）（単辺朱丸印）「黒川真道藏書」（単辺朱長方印）の三種。墨付き本文最終丁裏に、「光鴻」（白文。飄筆型朱印）と本学の印「実践女子大学図書館印」（単辺朱長円印）を捺す。

三 成立時期

黒川本の施注時期を暗示すると思われる三つの例を紹介する。

第一の例は、通行章段でいう第23段（以後、通行章段は算用数字、並びの章段には漢数字を用い、表記を区別する）の「女五のみこ」の注である。『鈔』諸本では

寛平第五の皇女 後撰に宇多院に侍ける人にせうそこつかハし御返事も侍らさりければ よミ人しらす

うたの野ハみ、なし山かよふこ鳥よふ声にたにこたへさるらん

返し 女五のみこ

み、なしの山ならすともよふこ鳥なにかハきかん時ならぬ音を

とよみ給ふ人也

とするが、黒川本では、頭注に

女五の御子ハ寛永第五の皇女 依子内親王也 民部卿昇女也 後撰に宇多院に侍ける人に消息つかはしけるに御返事

も侍らさりければ よミ人しらす

宇多の野はみ、なし山かよふこ鳥よふこ糸にたにこたへさるらん
女五の御子

み、なしの山ならずともよふこ鳥なにかはきかん時ならぬ音を

とよみ給人也

とある。私に施した傍線部「寛永」は明らかに誤りであり、『鈔』諸本にいう「寛平」の誤写であろう。寛永は一六二四から一六四三年までであるから、この誤写はそれ以降の記述ということになりはしないだろうか。

第二の例は、第71段の和歌「さきにはひかせまつほとはやまさくらひとのよ、りはひさしかりける」のなかの「かせ」の傍注として、黒川本には

判ニハかけと有

とあること。これは他の『鈔』に無い黒川本の独自注である。それにしてもここという「判」とはどの版本をさすのか。因みにこのくだり、おもだった版本の本文異同をまとめると次のようになる。

イ かせ…拾穂抄・首書・群書類従・冠注

ロ かけ…古活字・慶安版本

一方第144段の物語本文「時くしける心あるものにて人の国の哀れに心ほそきところく」の傍注でも、黒川本には「是迄判本落字也」という独自の行間注（朱筆）が加わっており、このくだり、おもだった版本は次のような異同となっている。

イ （本行にあり）…古活字・拾穂抄・首書・群書類従・冠注

ロ （本行に無し）…慶安版本

両者を勘案するならば、黒川本の独自注がいう「判本」とは、慶安版本のことなのではないか。同書の刊行は慶安元年（一六四八）。するとこの注記は同年以降の施注ということになりはしないだろうか。

第三の例は、黒川本には本文第一丁目に料簡めいた記述があり、冒頭の「大和物語之題号者神皇正統記云大倭者訓夜麻土云々 日本トモヨメリ…」ではじまる一つ書きが『首書大和物語』の序文と一致する点である。『首書』の注記は多くの『拾穂抄』に依っているが、このくだりは『拾穂抄』にも無い。一方、『首書』と一致する黒川本のこの筆跡は、同本の注記で多くを占める筆跡に酷似しており、同筆と判断した。仮に黒川本が『首書』の記述を転載したとするならば、同書の刊行は明暦三年（一六五七）であるから、それ以降のものということになる。

四 物語本文について

前述した今井論文によれば、『鈔』の諸本は、(A) 物語の全文を揭示するものと (B) 冒頭の数句のみを記しあとは省略するものとに大別できるといふ。氏の説に従って、現行の諸本を分類すれば、次のようにならうか。

(A) 日本大学総合図書館本（日大本と略）

・内閣文庫本（内閣本と略）

・島原松平文庫旧藏高橋正治氏藏本（高橋本と略）

・古典文庫掲載賀茂季鷹書写本（翻刻のみで原本散逸。季鷹本と略）

(B) 国立国会図書館蔵本（国会本と略）……148段以降の物語本文を省略する。

・素行文庫蔵山鹿素行手沢本（零本。素行本と略）……初段のみ物語本文全文を記す。

物語本文の全文を有する黒川本は、当然のことながら前者に属する。但し、黒川本のみが有する物語本文の書式上の特色として、次の三点が挙げられるように思う。

一 『鈔』の諸本が、各段末尾に当該段の注を一括記述し、結果、物語本文は段毎に注で区切られているのに対して、

黒川本の物語本文は匡郭内に連続して記されており、注は物語本文の行間や匡郭外に分散記述する形式であること。

二 『鈔』の諸本が、各段冒頭の肩付きに「初段」「初段豎並」「第二段」「第三段」などと並びの段序を書き入れているのに対して、黒川本は段毎に改行はするものの、原則として段序の数詞は記さないこと。但し、書写成立後に各

段冒頭に朱の鉤点を付し、また朱墨両筆で「並」と記述したり、逆にこれらを塗消した箇所もあること。

三 『鈔』諸本に欠落している74段と102段の物語本文を、当該箇所にも、しかも注をつけて記述してあること。

黒川本がこのような書式をとるにいたった経緯は不明だが、書式のみならず物語本文もまた、黒川本は『鈔』諸本中かなり独自なものとなっている。結論をさきに述べるならば、『鈔』の一本を底本にしたのではなく、慶安版本を中心に、これに『鈔』や二条家流の本文等を参照し、いわゆる校訂本文を作り上げていたのではないかと思われる。

以下、その主立った理由を述べよう。

『鈔』が底本ではないと判断した理由は、第一に『鈔』諸本に欠落している二つの段を黒川本のみが当該箇所にも有している点である。このことは、『鈔』を底本とし、それを忠実に書写したのであれば、決して起こり得ない現象である。

第二に、黒川本には書式の相違が引き起こしたと思われる段構成上の異同、換言するならば章段の区切り方に関する異同がみられる点である。

例えば、69段と70段。『鈔』諸本の場合、この両段は一括して記され、70段の文末に両段の注記がしるされてある。く

わしくいうと、69段の肩付きに並びの段序「五十六段」が記入され、69段の文末後は改行することなくそのまま70段の冒頭句がつづき、70段が終わって、兩段の注が入り、そのあと改行「五十七段」という肩付きで新たに71段が始まっているのである。ということは、通行本の段序でいうところの第69と70段は、『鈔』諸本ではともに「五十六段」として扱われていたということになる。

ところが黒川本の場合、70段で改行し、かつその冒頭には朱の鉤点を振っている。ということは、黒川本は69段と70段をそれぞれ独立した章段とみなして、書写していたようである。もし仮に、黒川本が『鈔』諸本の物語本文を底本としていたのであつたら、このような章段の区切り方は起こらなかったのではあるまいか。

同様の異同は、87と88段・89と90段・105と106段・109と110段・122と123段にも見られる。

また通行段でいう168段も然り。この章段は、a良少将出家の話・b小野小町との贈答歌・c出家した子どもの話と、良少将をめぐる三つの話からなるかなりな長編であるが、『鈔』諸本はこの三話を、aを「一八〇段」bを「前段のならひ」cを「ならひ」として独立させ、それぞれの段末に注記を挟んでいる。

しかるに黒川本は、aとbだけは改行と鉤点と「並」の記述で、独立させたものの、cはbと改行することなく同一行で続けて書写している。尤も、cの肩には「並」の傍注が書き入れられたが、これは物語本文を書写した後の操作であろう。少なくとも物語を書写した時点では、bとcは一括した章段として写されていたわけで、かかる現象は『鈔』を底本としていたならば、決して起こり得なかったように思う。

第三の例は、『鈔』諸本のなかで黒川本の独自異文が目立つという点である。以下、顕著な例を挙げてみよう。

「鈔」諸本	黒川本	備考
<p>【146段】</p> <p>皆人くよませ給けりさておほせ給けるやう玉ふちはいとらうありて哥なといとようよみき此とりかゐといふ題をいと（*国・田同高点線部「い」）</p>	<p>（。皆人くよませ給けりさておほせ給けるやう玉ふちはいとらうありて哥なといとようよみき此とりかゐといふ題をいと 是迄落字也）</p> <p>（*本行ニナシ。朱筆ニテ補入）</p>	<p>古・慶…（*ナシ）</p> <p>拾・首…人々によませ給ひにけりおほせ給ふやうたまふちはいとらうありて哥などよくよみき此鳥かひといふ題を</p>
<p>【152段】</p> <p>物ものたまはせずきこしめしつけぬにやあらんとて又そうし給におもてをのみまもらせ給ふて（*高同田点線部「きこしめして」「む」）</p>	<p>（*ナシ）</p>	<p>慶…（*ナシ）</p> <p>古・拾・首…物ものたまはせず聞しめしつけぬにやあらんとて又そうし給ふにおもてをのみまもらせ給ふて</p>

146段で、「皆人く…題をいと」までのくだりが、黒川本本行には欠けている。もつとも、黒川本はその後朱筆で欠落本文を書き入れ、「是迄落字也」と注記していることから、この段階になると『鈔』を参照していた可能性がある。なおこのくだり、古活字本や慶安版本の本文も欠落している。

152段でも、黒川本は「物も…まもらせ給ふて」までを欠いており、慶安版本も同様の動きを示している。但しここでは

146段とは異なり、黒川本に落字の指摘はない。

【168段】

ほうしにや成にけん身をやなくてん

法師になりたらはさてなむあるとも

聞えなんな身をなけたる成へしと

おもふに世中にもいみしうあはれか

りめこともはさらにもいはすよるひ

るさうしいもゐをしてせけんの仏神

に願をたてまへとをとにもきこえ

す（*高・田同）

（*ナシ）

古・慶…（*ナシ）

拾・首…ほうしにや成にけん身を

やなくてけん法師になりたらばさて

なんあるとも聞えなん猶身をなけた

る成へしと思ふに世中にもいみしう

哀かりめ子共は更にもいはすよるひ

るさうしいもゐをしてせけんの神仏

に願をたてまへとをとにも聞えず

168段においても、黒川本は本文に大きな欠落をみせ、同様の欠落は古活字本と慶安版本にも認めうる。但し、本例で興味深いのは、黒川本が欠落本文中の「さうしいもゐ」の語義について、『鈔』諸本と同じ「精進齋也 精進ハ内外六根の王精進也 齊ハ禁足安座也」の注を記している点である。

この注記は、黒川本の注記中よく見かける筆跡であり、記された位置も欠落付近の頭注部分である。どこに書き入れるか迷ったのではないかと思われるが、ほぼ妥当な位置に記されてある。施注者は物語中に当該本文のないことを承知してしながら、『鈔』から引いた語義を転写し、かつ物語本文を訂正することもしなかった、と思われる。

【170段】

その返事にいとうれしうとひ給へる

事（*高・田同）

（*ナシ）

古・慶…（*ナシ）

拾・首…そのかへりことにいと嬉
しくとひ給へる

170段、黒川本には古活字本や慶安版本同様の欠落がある。

以上のようにみてくると、黒川本の物語本文が『鈔』を底本にしていたとは考えがたく、むしろ慶安版本との類似度の方が遙かに強いようである。

実際、慶安版本との異同は極めて少なく、『鈔』諸本・古活字本・拾穂抄・勝命本・細川本・群書類従本・首書などと比較しても、その近似値は群を抜いている。

また黒川本は時折、「わたり」を「はたり」、「わらは」を「はらは」とするなど独特の仮名遣いをしているが、これは慶安版本も同様である。それどころか、慶安版本の方が徹底しているところをみるに、黒川本の仮名遣いは同書の影響を受けた可能性が強いようである。

とはいうものの、慶安版本をもつて底本にしたとも思われない。そう仮定して、破綻をきたす事例を挙げてみよう。

慶安版本	黒川本	備考
<p>【144段】</p> <p>この事も、人のくにかよひをなん</p>	<p>この^子こども、人の国に^にかよひをなん</p>	<p>鈔…この子とも、人の国にかよひをなん</p> <p>活…このことも、人のくにかよひをなん</p> <p>拾・首…この子ども、人のくにかよひをなん</p>

慶安版本は「事」という漢字表記からみて「この事」と解釈していたようである。しかるに黒川本は「こども」とし、「子」の振り漢字まで宛てている。但し次の「くにかよひ」のくだりでは、「国にかよひ」と訂正し、慶安版本と一致している。

<p>【144段】</p> <p>時々</p>	<p>時くしける心あるものにて人の国の哀れに心ほそきところく</p> <p>〔是迄判本落字也〕（＊）〔内朱傍注〕</p>	<p>鈔・古・拾・首…時くしける心有ものにて人の国のあはれに心ほそき所く</p>
-------------------------	--	--

黒川本には「是迄判本落字也」という朱注が加わっている。古活字版・拾穂抄・首書などは『鈔』と同文。よって落字

が認められるのは慶安版本ということになる。朱筆書き入れの段階では版本を披見していたようである。

<p>【158段】 さらに</p>	<p>よりこずいとうしとおもへどさらに</p>	<p>鈔…さらに</p>
-----------------------	-------------------------	--------------

慶安版本にも『鈔』にもみえない本文。但し、

勝命本「さらによりこずまたみし人やあるとも思あえずいとうしとのみ思へど」

黒川本「さらによりこずいとうしとおもへどさらに」

拾穂抄・首書「さらによりこずいとうしと思へど更に」

とあり、黒川本のような本文は他にもあつたようである。ともあれ、本例によって、黒川本は『鈔』や慶安版本以外の本文をも利用していたらしいことが窺われよう。

<p>【161段】 みやしろにて</p>	<p>御車のあたりになまくらき折にたてりけりみやしろにて</p>	<p>鈔・古…御くるまのあたりになまくらきおりにたてりけりみやしろにて</p>
--------------------------	----------------------------------	---

慶安版本は「御車…たてりけり」までの本文が欠落している。

以上、『鈔』が底本でない理由、慶安版本がそのまま底本となったわけでもない理由を述べた。黒川本は慶安版本をベースにしながら、『鈔』や他の諸本も参照しつつ、独自に校訂本文を作成していったものと思われる。

五 注記について

本章では、(一) 黒川本が披見した可能性のある『鈔』はどの本か (二) 黒川本は『鈔』の注記をどのように継承しているか (三) 黒川本の独自注はどのようなものか という三点から分析する。

(一) 黒川本が披見した可能性のある『鈔』

黒川本には120段に「是より下巻」という注記がある。これは、同本が披見した『鈔』の巻構成を指しているのだろう。だとすれば、それは上下二冊本で、120段をもつて下巻とする本文だったことになる。現存する諸本中、条件をみたすのは、国会本と日大本の二本である。

無論、既に散逸してしまった写本や未だ管見に入らない写本があるかもしれない、安易な推論は慎むべきではある。しかしだからといって、未見の本文があるかもしれないという危惧をもつて分析を停止すべきものでもないように思う。(披見しえた諸本の中で)という条件下での作業ではあるが、(黒川本が披見した本文として、国会本と日大本のいずれが妥当か)という問題について、しばらく分析を続けたい。はじめに、国会本と日大本そして黒川本の相違点を表示する。

国会本には148段以降の物語本文が無く、74段も欠落。102段は101段の注記の上欄余白に物語本文のみが書き入れられているが、本行とは別筆のようである。一方日大本は、全段にわたって物語本文を揭示し、74段と102段についても「師本になく諸本にある二段」として、葉雪が下巻の奥に物語本文を書き入れている。

日大本が優勢なようだが、但し既述したごとく、黒川本の物語本文は複数の本文による校訂本文と判断できるので、この点をもって日大本と速断はできない。

それよりもむしろ、日大本の大きな特色であるところの潤沢な異文表示が、黒川本に継承されていないことの方が重要な点ではあるまいか。

注記	本文物語				
	102段の処理	74段の処理	勝命本との異文注記	今井氏説による分類	
高・内・鷹とほぼ同じ	101段の上欄余白に本文を書き入れる（本行と別筆） 注記ナシ	章段ナシ	ナシ	B	国会本
推敲を施したものか ※奥書参照	両段とも、他本により本文を巻末に補入する。注記ナシ	※奥書にも明示 アリ	A	日大本	
分散表記、抄出	両段とも、注記を付して本文を当該箇所 に記す	ナシ	A	黒川本	

日本本の異文表示は、葉雪奥書にいうところの、田丸西位所持勝命本との校合結果と判断できる。現存する勝命本と比較するに、校異の指摘がある部分は、ほぼこれに一致するからである（但し校異の指摘が無いくだりでも、日本本と勝命本との間にはかなりの異同がみられ、葉雪の校異がどこまで厳密なものであったか、疑問ではある）。

黒川本には勝命本との校異が記されていないが、これは黒川本が校異に全く関心を示さなかったからではない。時折、版本との異同が書き入れられているからである。すると勝命本との校異が入らなかったのは、日本本を見ることができなかったからと推測する方が妥当なのではあるまいか。

次に注記の面からみていこう。注記のなかには国会本との親密度を示唆する事例が数多くある。そのなかの幾つかを紹介する。

① 85段「よしおもへの哥」の注記

国会本	日本本	黒川本
<p>よくおほしめしわけよ也 海士のひろはぬうつせ貝卑下にしてやさしき序也 下句明也</p> <p>なき名をまこととなし給へと也うつせ貝うつせみたゝうつくしき事をいふとあり これはみのなき也</p>	<p>序哥也</p> <p>なき名をまこと、なし給へと也 うつせみうつせ貝たゝうつくしきをも云之 これはみのなき也</p>	<p>哥の心はよくおほしめしわけよ也 海士のひろはぬうつせ貝は卑下にしてやさしき序也</p> <p>なき名をまこと、なし給へと也 うつせ貝うつせみたゝうつくしき事をいふと也 これはみのなき貝の事也</p>

傍線部、国会本と黒川本はほぼ共通しているが、日本本は欠落している。なお、高橋本・内閣本・季鷹本は国会本とは共通している。

②155段「まちわひ」の注記

まちまひて 待わたりて也 立まひ なと云也	まちわひ 待わたりて也 立まひな といふ也	待まひて 待わたりて也 立まひな と云心也
--------------------------	--------------------------	--------------------------

「まちまひて」は「まちわひて」の誤写であろう。「わ(王)」のくずしを「ま」と見誤つたためかと思われる。諸本中「まちまひて」とするのは、国会本と黒川本のみ。日本本・高橋本・内閣本は「まちわひ」とし、季鷹本は「まちわひて」とする。

③155段「浅か山の哥」の注記

葛城王 ^{ヲホキミ} 橋諸兄 陸奥国へ下り給ふ時国の守おろそかなれはけしき冷しきを采女土器とりて銚子に水を入おほきみのひさをたゝき此哥をよみてなためけると也 万葉にあり	葛城王 ^{ヲホキミ} 橋諸兄 陸奥国へ下り給ふ時国の守をろそかなれはけしき冷しきを采女土器とりて銚子に水を入おほきみのひさをたゝき此哥をよみてなためけると也 万葉にあり	葛城王 ^{ヲホキミ} 橋諸兄奥州ノ將軍ニテ 陸奥国へ下り給ふ時国の守おろそかなれはけしき冷しきを先の采女土器とりて銚子に水を入おほきみのひさをたゝき此哥をよみてなためけると有也
---	---	---

哥の母と云事有口伝

此女我かほのおそろしけに成をしら
て山の井に移る影をみて恥かしと思
ひ男里に出て帰らぬを我かくなれは
すて、こぬ也と恨て古き哥の心をか
へて捨るほと心浅さにて遠くさそ
ひくるかといへる心也

古哥の心を用かゆる事多し 又折に
かなひたる古哥を詠するは新哥をよ
むにまさると先達のおしへ也

此女我かほのおそろしけに成をしら
て山の井に移る影をみてはすかしと
思ひ男里に出て帰らぬを我かくなれ
はすて、こぬなりと恨て古哥の心を
かへて捨るほと浅き心にて遠くさ
そひくるかといへる心也

哥の母と云事有口伝

哥の心は此女我顔のおそろしけにな
るをしらて山の井に移る影を見て恥
かしとおもひ男里に出て帰らぬを我
かくなれは捨てこぬ也と恨て古き哥
の心をかへて捨るほと心浅さにて
遠くさそひくるかといへる心也

古哥の心を用かゆる事多し 又折に
ふれ古哥をしらて詠するは新哥をよ
むにまさると先達のおしへ也

傍線部分が国会本と黒川本にのみあり、日本本では欠落している。高橋本・内閣本・季鷹本は、ここでは日本本と同様の欠落をみせ、のこる本文もほぼ共通している。

④ 168段「此せうとの兵衛督」の項

<p>参議伊衡也 承平七年任左兵衛督</p> <p>私伊衡ハ敏行カ子也 敏行カムスメノセウ トノ事也</p>	<p>参議伊衡也 承平七年任左兵衛督</p>	<p>参議伊衡也 承平七年任左兵衛督</p> <p>此説不慥 敏行女ナシ 私云伊衡ハ敏 行カ子也 敏行カむすめのせうとの事也</p>
--	------------------------	--

傍線部分が国会本と黒川本で共通し、日大本では欠落している。高橋本・内閣本・季鷹本は国会本とほぼ共通している。以上四例は、日大本になく国会本にある注記を、黒川本が継承した例である。殊に②③の例は、『鈔』諸本中、国会本と黒川本のみ共通異文となっている。黒川本が披見したであろう『鈔』として最も可能性が高いのは、国会本ないしはそれに類した本と判断できるように思う。

(二) 黒川本は『鈔』の注記をどのように継承しているか

各章段の末に当該章段の注記を一括する『鈔』の書式は、長い章段になると物語本文と注記とが完全に分離してしまい(時にはその隔たりが数丁にわたることもある)、両者を同時に見比べながら読み進められないという不便が残る。この点を改め、物語本文と注記とを連動的に享受できるよう工夫したのが黒川本である。『首書大和物語』などを踏襲したのかもしれないが、『鈔』を継承する際に、書式を首書形式に改めたという発想の柔軟さは注目に値しよう。

とはいっても、実際問題として、黒川本は個々の『鈔』注を一体どのように置き換えているのだろう。首書形式の利点をうまく活かしたと思われる例、逆に混乱を招いてしまった例など、さまざまだが、幾つか具体例をあげながら分析してみよう。

【例一】初段のなかの伊勢の歌

わかるれとあひもをしまぬも、しきを見さらんことのかなにかなしき

について、『鈔』（以後、特に断りのない限り『鈔』の引用は国会本による）では次のような注を記している。

別るれとの歌

おしまれぬ身なれば 又も、敷をみさらんはなによりかなしきと也

古今に歌めしける時たてまつるとて読ておくにかきつけて奉りける

伊勢

山川のおとにのみきくも、しきを身をはやなからみるよしもかな

といへり

これに対して黒川本は、和歌の傍注として

をしまれぬ身なれど也

何よりかなしきと也

と記し、更に頭注扱いで

古今に哥めしける時たてまつるとてよみておくに書付奉りける

山川の音にのみ聞百しきを身をはやなから見るよしも哉

と書写している。

私に網を被せた部分が両者に共通する部分である。注記の本文に多少の異同はあるが、これは黒川本が『鈔』の注記を自己流にまとめたためであろう。

ともあれ、注意したいのは、黒川本が歌の解釈を傍注に、出典を頭注にと、内容に応じて先行注を分割書写している点である。かかる方式は、人物についての注と和歌についての注に数多く見いだせるが、首書形式の利点を活かした工夫といえるのではあるまいか。

【例二】51・52の両段は、『鈔』では「第四十一段」として一括されている。短い章段なので物語本文全文を記しておこう。

51 齋院より内に

おなじえをわきてしもをく秋なればひかりもつらくおもほゆるかな

御かへし

はなの色をみてもしりなん初霜の心ゆきてはをかじとぞおもふ

52 これも内（。）の御返し

わたつみのふかき心を置なからうらみられぬるものにぞありける

（※引用は黒川本。但し「51」「52」は稿者）

この章段の注を、『鈔』ではa～f六項目にわたって、次のように列挙している。

a 齋院は齋子親王也

b 内は延喜帝也 延喜齋院の御事也と云説有 如何 此三首親王贈答の御哥也

選子内親王八天曆（。）帝 第七宮也 此物語に志賀の山越の道に岩江といふ所に家つくり

c おなし枝をの哥 御子たち多き中にわきて齋院にをき給へはひかりもつらくと御述懐也 秋に飽の心あり

d 御返し 花の色をの御哥千種の花にいつれもわかすをく霜ハ心とならす秋来てをく也 齋院にのみ給ふもさたまりた

る神事にて御うらによりてなれはみかとの御心とならすことほり給ふ也

e 神事式云天皇即位者定賀茂大神 齊王^{（ツミ）} 仍^{（ナラ）}簡内親王未^{（ミナ）}嫁者卜定云々

f わたつみの哥 ふかき御あわれひなからうらみられ給ふと也

なり給ふ也

此齋院延喜廿一年賀茂をしりそき大納言清蔭の室と

(※ a・f・傍線・網掛け稿者。以下同様)

かかる『鈔』の諸注を黒川本はどのように継承しているのか。まず a の「齋院」については頭注に

齋院ハ延喜ノ皇女留子内親王也

此齋院延喜廿一年賀茂ヲしりそき大納言清蔭室卜成給也

とする。『鈔』の冒頭注 a と、末尾注 f のなかの後半部分を繋ぎ合わせて、ひとつの頭注としたようである。尤も、一行目と二行目の間には若干の空白が見られることから、はじめは a を頭注とし、その後 f にいたって、前半部分は物語本文（和歌）の傍注としたものの、後半部分は同じ留子内親王の記事ということで、ここだけを再び頭注にもつてきたのだろう。書写しながら編集意識を働かせていたようである。

次に b について。黒川本は物語本文「内に」の傍注に「延喜也」とするだけで、傍線部分はすべて割愛している。割愛されたこのくだり、国会本は「家づくり」で終わっており、中途半端な感が否めない。他の『鈔』によれば、このあと「給ふ 兵部卿宮は第三のみこ也」という文章が続いている。すると黒川本は、途中で途切れたこの注に重きを置かなかつたために割愛したものか。ということとは、『鈔』注を吟味し、取捨選択しながら、これを書写していたことになる。

また c のくだり。黒川本は和歌の傍注として

哥マダカの心は延喜へうちなけきて御子 立タツマもあまたあるか中ナカに分て齋院に置たまへは天子をひかりにたとへてひかりも
つらく一入おもほゆると御述懐也 秋に飽ノ心有 御兄弟を連理といふによりておなしえとおけり

と記している。『鈔』の本文と比較すると、点線を施した部分で黒川本はかなり筆を補っており、先行注の意を汲んで自分の言葉でまとめ直したことが窺えよう。最後の「御兄弟を……」のくだりなどは自注の追加とみた方が妥当かもしれない。

『鈔』諸本間にも注記の本文異同はあり、ことに葉雪が編集し直したとみられる日大本の場合、改変の度合いが強いよ

うである。しかし『鈔』の注記を組み替え、取捨選択し、かつ自らの言葉でまとめ直した黒川本の改変は、それ以上に自在なものである。

【例三】『鈔』の書式では、注記はいくらでも長文化することが可能であるが、首書方式では限られたスペースのなかで、という制約条件がついてくる。ここで採り上げるのはそうした問題から派生したのではないかと思われる現象である。

13段の和歌に

なき人を君がきかくにかけしとてなくくしのふほとなうらみそ

とある。妻としこを喪った藤原千兼に、亡妻と親交のあった一条の君からの弔問がない。寂しく思った千兼が一条の君の従者に歌をよみ、これはその返しである。

まず『鈔』の注記では

a なき人の哥はすさの女一条かなをさりをちんはうしたる哥也

上の句聞えかたし説有也 但なき人を君かきかくに

かけしとては千兼かなき人の事をふかくなけくは一条の君とふらはなをなけきそへ給はんほとにとふらひいしとてなくくしのふほとをなうらみそとことはりたる也

b 君かきかくには此物語のかつらのみこの哥に それを

たにおもふ事とて我やとをみきとないひそ人のきかくに とある

人のきかくには 人のきくに也

君かきかくに

は千兼かきくに也

c かけしとてはいはしとて也

源氏は、木、の巻にもみきとないひそ よし今はみきとなかけそとかけり

かけそは

いひそ也 かけしとてはいはしとて也 君かきかくにかけしとては君かきかくにいはいしとて也 下句明也

とある。国会本では歌の解釈を施したaと類歌を紹介したbとを一括するが、『鈔』の諸本のなかには、a b cをそれぞれ

れ別項目に処理した本もある。

一方黒川本は、『鈔』の中の傍線部分を継承したようで、頭注扱いで、次のように引用書写した。

a' 哥の心は一条かなをざりをちんほうしたる哥也／

(を)

b' 従者 君かきかくには此物語の桂の御子の哥にそれだにおもふ事とて我宿をみきとないひそ人のきかくにと有も

人のきくによ

a' 千兼か無人の事を深く歎き居るを一条の君とふらは、猶なけきを添給はん程に／

とむらひいはしとてなく／忍ふほとをうらみそとことはりたる哥也 c' かけじとてはいはしとて也 源氏母木、

の巻にもみきとないひそをよし今は／

みきとなかけそとかける也／

(※／改行)

「なき人を」の歌は八丁表、片面十一行のなかの九行目と十行目に記されており、この頭注もわざわざその付近に記されているのだが、問題は、余白が幾ばくも残っていないことである。そのため頭注の第二行目と第四行目などは、物語本文の行間余白にまでおりてきている。

さてこれを『鈔』注と比較すると、a'の注記の間に、網をかけたb'の注記が入り込んでいるのが解る。頭注は五行。その行間に不自然な空白は無く、筆跡・墨色も同じであることから、あとからb'の一行を挿入したとも思われない。

蓋しこれは、余白が少ないこともあって、当初はa'からの引用を「一条かなをざりをちんほうしたる哥也」だけにとどめ、b'へと進んだが、やはり歌意を記したa'の後半部分も残して置いた方が良いと判断したために起こった、掲出順序の逆転なのではあるまいか。

黒川本にかかる逆転現象は珍しくはない。なかには、後から書き入れたために注記の前後が逆になったとみられるもの

も多数あるのだが、本例は余白との兼ね合いで『鈔』の注記を選別書写していった書写者の、逡巡を物語る例として紹介した。

以上は書写過程における継承態度であつたが、書写成立後もこれを再吟味し、改変を加えたと見られるものがある。二例ほど挙げてみよう。

【例四】例えば56段の和歌、

夕されはみちも見えねどふるさとはもときし駒にまかせてぞゆく

の注記もそのひとつ。『鈔』ではこの和歌に

夕されはの哥 老たる馬ぞ道しるへなるの心にはあらず た、中絶して又きたるを

かつはちたり 道も見えねと夕の道に仁道を添たり

日本紀豊玉姫聞^{ニトヨ} 其児端^{キヒテ} 正^{ミコノキヲ}心甚憐^{シキツ} 重^{カアハレヒカメテ} 欲^{ヲホス}二 復帰^{マタカヘリヒタサント} 養^{テコトハリニ}一 於^{スヨカラト}義 不^{スヨカラト}レ可^{スヨカラト}云々

という注記を施している。

これに対して黒川本は、まず本行和歌の右傍に、

哥の心或説ニ云老たる馬ぞ道しるへなるの心にはあらず た、中絶して又きたるを

かつ恥たり 道も見えねと夕の道に仁道を添たりと云々 此説いか、不用

と記し、和歌に後続する地の文「女返し」の下に

日本紀豊玉姫聞^{ニトヨ} 其児端^{キヒテ} 正^{ミコノキヲ}心甚憐^{シキツ} 重^{カアハレヒカメテ} 欲^{ヲホス}二 復帰^{マタカヘリヒタサント} 養^{テコトハリニ}一 於^{スヨカラト}義 不^{スヨカラト}レ可^{スヨカラト}云々 此説もいか、

と記した。網掛け部分以外は、ほぼ忠実に書写したといえるだろう。

問題は、その網掛け部分。筆跡は同じだが、「此説いか、不用」「此説もいか」と、自らが書写した『鈔』注に対して疑問を提示している。のみならず、和歌の左傍には

老たる馬を道しるへなるの心也

と、『鈔』が否定した解釈の方をとりあげて、わざわざこれを書き加えている。この追加は他の『鈔』には全くみられず、黒川本独自のものである。これらは黒川本が、ただやみくもに『鈔』注を転写していたのではなく、引用した『鈔』注を再吟味し、自説を加えていたことの証として受け止められよう。

【例五】他文献からの記述も詳細に記し、それをもとに『鈔』注を訂正したと思われる例がある。69段の冒頭「忠文がみちのくにの將軍になりて」のくだり、『鈔』では次のa b二つの項目を挙げている。

a 忠文 参議修理大夫 天慶三年正月廿九日右衛門督征夷大將軍

b みちのくにの將軍 鎮守將軍也 征夷以前鎮守將軍にて下りし時也 平將門か叛乱之時任征夷大將軍

これに対して黒川本は、まず頭注に

a' 忠文参議修理大夫 天慶三年正月廿九日右衛門督征夷大將軍 b' 陸奥の將軍ハ鎮守將軍也 征夷以前鎮守將軍ニて下りし時なり 平將門叛乱之時任征夷大將軍云々 勸物ノ説歟 鎮守府沙汰系図等ニナシ

と記す。傍線を施した部分が共通することから、『鈔』注 a b を全て引用し、かつ最後の網をかけた部分を新しく補ったようである。なお、a' の「征夷大將軍」のくだり、「夷」の部分で擦消したままになっている点に注意したい。

ところが黒川本の注記はこれだけでは収まらなかった。おそらくは『鈔』注書写後の見直しの時になされたものだろうが、同じ書写者が、今度は物語本文「忠文がみちのくにの將軍になりて」の傍注として、次の c d e を加えている。

c 忠文ハ藤原枝良子宇合ノ流也 参議修理太夫忠文ト云々 天慶三年正月廿九日右衛門督征東大將軍

d 天曆元年六月廿六日薨年七十五

e 職原^ニ曰 平将門叛乱ノ時参議右衛門督藤原忠文朝臣任^ニ征東大將軍^{トアリ}

網をかけた部分は、『鈔』注からは得られず、eは『職原抄』、cdは『尊卑分脈』（就中、同書には「征夷大將軍或号征東大將軍也」ともある）を参照すれば抽出可能である。頭注^aの文末に「鎮守府沙汰系図等二なし」とあることから、この書写者は「系図」等、『鈔』以外の文献を参照していたことが窺われよう。結局鎮守府の問題は解決できなかったものの、新たに得られた情報もあったので、重複を厭わずそのまま書き加えた、cdeはその産物ではなからうか。更にいうならば、『鈔』注を引用した頭注^aで「征夷大將軍」の「夷」が擦り消されているのは、自らが調べた資料には「東」とあったので、これに倣おうとしたものかと思われる。

なお、cは物語本文のすぐ右に、eは更にその右脇に、dはceの下方余白に記された。その結果、頭注と類似した内容の注記が物語本文中にも集中することになり、紙面は煩瑣を極めた。本来ならばこれらの注を整理して、一つにまとめしまえばよかったのだろうが、黒川本は稿本の段階でとどまり、清書するには至っていなかったのだろう。

以上、黒川本が『鈔』の注記をどのように継承しているかという観点から、幾つかの例を分析してみた。書写の当初から、首書形式への移行という条件を背負っていたためであろうか、『鈔』を書写する際には

- ① ひとつの注を分割して配置する
- ② 異なった注を一括して記す
- ③ 採用しなかった注がある

④自分の言葉でまとめ直して書写する

など、常に編集意識を働かせていたようである。そしてその後も彼は

⑤書写した『鈔』注を再吟味し、評価や自説を加える

⑥他文献を利用し、『鈔』注への訂正を試みる

などの見直しを行っている。これは、黒川本が『鈔』の写本としての性格から次第に遊離しはじめ、施注者自身の研究ノートへと変貌を遂げつつあることを物語るのではなからうか。

なお、この施注者は書写した『鈔』注を見直した際、墨筆を朱筆に換えた時もあった。また⑤⑥の中には、この施注者以外の筆もある。かくして黒川本は、同一施注者による数次の書き入れ段階と複数者による加筆の段階とを経て、いよいよ膨張しはじめていったようである。

(三) 黒川本の独自注はどのようなものか

ここでいう「独自注」とは、『鈔』諸本間において黒川本にのみ見られる注記を指す。そのうちの幾つかは既に(二)でも触れてきたが、ここでまとめて論じたい。

【例一】独自注でまず報告すべきは、『鈔』諸本に欠落している74段と102段に置かれた注記についてであろう。ともに短い章段なので、全文を紹介する。

黒川本第74段

a 並

c
後撰詞書ニハ前栽に紅梅をうへて
又の年ひらきければとアリ

d
後撰ニハ
紅梅をうへしに まちどをにのみ見ゆるはなかなか
またの年ひらきければ
とよみ給ける

b 中納言の家也

〽おなし中納言かの殿のしんせでんのまへにすこし
とをくたてりける桜をちかくほりうへ給けるが
かれざまにみえければ
宿ちかくうつしてうへしかひもなく

独自注は a、d の四例だが、c、d はほぼ同じ内容なので、実質的には三例ということになる。なお d は他とは筆跡が異なるようである。黒川本はこの三つをどこから持ってきたのか。これと重なる注記が他の注釈書にあるのだろうか。

まず a について。かつて今井氏が、大和物語の諸注釈書のなかでも稀有と評したごとく、並びの指摘は『鈔』独自のもののようである。その『鈔』に本段が欠落している以上、並びの指摘がないのも当然で、おそらくこれは黒川本の施注者が自らの判断によって加えたものであらう。『鈔』では並びの定義について「段のならばたてよこの心は本段の次の事あるは豎也 本段の事よりさきありし事を次に有は横也 豎横交たるは何も豎に成と云々」(12段)と解説していた。『鈔』の解説をよみ、そこに記された個々の並びを学習してきた彼ならば、「おなじ中納言」で始まる本段を「並」と認定するのは、さして困難なわざでもなかったように思う。

残る二つの注はどうだろう。黒川本が時折用いているとみられる大和物語の注釈書に『拾穂抄』と『首書』があるのだ

が、次表に示すごとくbとc dの二例は、これらと一部重なるようである。

	拾穂抄	首書
b	兼輔の御寝あり所也	(傍) 兼輔ノ御寝所也
c d	まちどをにとは 宿ちかくといふに對して也 枯さ まなるをかく遅きやうに讀なし給ふ優なるにや 後撰集に前裁に紅梅をうへて又のとしをそくひらき ければと此哥の言書に侍	(傍) 後撰 宿近に對たる詞也 枯さまなるを遅き やうによみなし給ふ 優なるにや (首) 後撰ノ詞書二前裁に紅梅をうへて又の年をそ くひらきければとあり

とはいふものの、bはごく簡単な注なので、先行注の存在を云々するほどのものではない。『拾穂抄』『首書』の場合には「兼輔」という個人名を比定している点で、それなりの意味もあるだろうが、黒川本の場合は文脈を追えば誰にでも理解できるような内容だからである。

c dでは傍線を施した後撰集詞書の引用などで、黒川本はこの両書と共通している。しかしながら両書の注の眼目は、「枯さまなるを遅きやうによみな」すという点にあるのだから、この点を欠いた黒川本の注記はいかにも中途半端なものになってしまっているようである。

独自注は a、d の四例。うち d は朱筆である。本段、『拾穂抄』『首書』では次のような注を記している。

	b	
	<p>拾穂抄</p> <p>酒井人真 古今作者 左中吏 河内国人云々</p> <p>ゆく人は 奥義抄に問云そのかみとは過にしかたをいふ也 文字にも當初とかけけるに</p> <p>さかゐの人真がやまひ大事にて山里へゆく時の哥に云 ゆく人はそのかみこんとよめる心はいかに</p> <p>答云そのかみは當時ともかけり その折といふことなり</p> <p>されは過にしかたをもいまゆくさきをもいは</p>	<p>首書</p> <p>(首) 酒井人真 古今作者 左中吏河内国人</p> <p>(首) 奥義抄云 当初と書ハ過にしかた也 當時と書ハその折と云事也 両やうに用る也 大和物語ニ生田川に身なけし女の詞ニそのかミ親いミしうさハきてとあり 當時の事也 此類おほし云々</p>

^a 酒井 人真ノ系圖不慥
 土佐守にありけるさかゐのひとさねといひける人やまひ
^b 京ノ家ヨリ鳥羽ノ家ヘ也
 してよはくなりてとはなりける家に行とて讀ける
^c 當時愛ニテ其佩ノ心也
 ゆく人はそのかみこんといふものを
^d 誰モ家ヲ出テ行人ハ帰テ来ント云モノヲ也
 心ほそしやけふのわかれは

<p>c d</p> <p>んにとがなし 大和物語にいくたのうみに身なけたる女のことはにもそのかみおやいみしうさはきてとあり 當時の事ときこゆ 是ならすあまた侍と云々 此物語にてはおしなへて當時の心也</p> <p>此うたの心はよのつね出行する人はやかて其時かへりこんなといふを此たひはかきりと思へは心ほそしと也</p>	<p>(傍) 當時也 物語ハをしなへて當時の心也</p> <p>(傍) 常に出行する人ハやかて其時かへりこんといふを此度ハ限りと思へは心ほそしと也</p>
--	---

黒川本の a 注は、酒井人真という人名漢字こそ一致するものの、「河内国人云々」といった情報を欠き、代わりに「系図不慥」という自らの調査結果を述べている。

b は文脈を読めば誰にでもわかる簡単な注である。c d は「当時」に「ソノカミ」という読み仮名をそえた点など、『拾穂抄』等を披見した可能性がある。朱筆で記された d は傍線を引いた部分とはば一致する。

以上みてきたごとく、『鈔』の欠落章段に対する黒川本の加注は、先行注を参照したかと思われるものも含まれてはいるが、多くは施注者自らが理解しえたところを書き添えたといった感の強い、ごく簡単なものである。

【例二】 とはいふものの、総体的に見れば、黒川本の独自注は種々の情報源を利用した、多彩なものになっている。試みに、独自注と判定しえた注記のなから、そこに記された引用書名ないしは書名相当語の幾つかを列挙してみよう。

①和歌関係：袋双紙・歌林良材・古今・後撰・新古今・新勅撰・古六帖（古今六帖か）千載・新千載・続後撰・詞花

集・続古今・拾遺・新六帖・新拾遺・新続古今・八代集作者系図・万葉・袖中抄

②日記・物語関係…大鏡・明星抄・水原・紫系抄^(マユ)(紫明抄か)・判の鈔(拾穂抄版本か) 源氏抄・世継物語・源氏夕か

ほの巻・土左日記・枕草紙

③その他…神皇正統記・善隣国宝・日本書紀・拾介(拾外抄か)・系図・大系図・書本系図・判の系・禁秘抄・職原・

事物紀原・勘物・師傳ノ勘物・唐令・和名(和名類聚抄か)・元亨釈書・漢書・淮南子・毛子弘安国注・顔

氏(顔氏家訓か)・詩経・楊氏漢語抄・説文(説文解字か)・韓愈詩・列子・纂疏(日本書紀纂疏か)・公

事根源・縁起(長谷寺縁起か)・蒙求

独自注に多いのは、和歌・人物・有職故実・漢語などに関するものであるが、ここに列挙した引用書名の一覧でも傾向はよく似ている。①③それぞれの具体例を示そう。

例えば③の「蒙求」。168段の物語本文「ちの涙にてなん有ける」のくだりで、黒川本は頭注に

蒙求云 弁^(マヤ) 和乃抱^テ其璞^ヲ 而哭^{コト} 於楚山之下^ニ 三日三夜泣盡^{シテ} 而繼之以^ス血^ヲ

と記す。『鈔』では単に「血の涙 紅涙」とだけあり、また『拾穂抄』には「奥義抄に卞和が玉になきし事 周奥か妻恋

て血涙川となりいづる事なとひき給へり」と言及するだけで、『蒙求』本文の引用までは及んでいない。黒川本は自ら『蒙求』を引いて用例を加えたものではあるまいか。

②の「明星抄・水原・紫系」の用例は、43段の物語本文「きりかけをなむ」の頭注に

きりかけ 明星抄に云たてさ部^部として今も大裏の床子床^{マヤ}の前などに有 かりそめにしたるしとミなどのやうなるもの
也ト云々 水原云大嘗會ノ時多用^{マヤ}之 陳座^座ノ前ニ立ル物也ト云々 紫系抄云壁などにすへき前^{トコロ}を板にてかりそめ
にがんぎなどのやうに板にてしたる物也 た、さし入内を見せしかため板ヲしとミてきりかけ^{アホセ}をしたるもの也ト云々

(※太字部分、原本朱筆)

とある。これは、『鈔』が「さし入に内をみせじため板をしとみてきりかけおほひしたる物也 源氏夕顔巻にきりかけだつものとかけり むかしは秘事とする也」、『拾穂抄』が「夕がほのまきにきりかけだつもの」とあり 板をめんどりばにしてふちをして牆のやうにせしものと也」とあるので、全く別の情報源から求めたものである。

但し源氏の注釈書をそのまま引用したのかといえは、この場合、かならずしもそうとは言ひ切れない。例えば「明星抄に云」のくだりは、同抄にもそうした記事が出ているのでよいとして、問題はそれとある。黒川本は既に逸文となっている『水原抄』を引くが、この注記と重なり、かつ「水原」という書名まで記すのは『仙源抄』の次の記事である。

紫明管三品公良云此事我なれてしる人なし云々 水原あなち秘事にあらず しとみやといふ物也 大嘗會之時多用之 陣座のまへにつねにたつる物也

また「紫系抄云」のくだり、これが『紫明抄』だとするならば、同抄にかかる記述は見つからない。類似の注記を強いてあげるとするならば『統源語類字鈔』の

昔は秘事也 不入事也 壁にせん所を板にてかんきにしたる所を云也
が、その前半部分に似てはいる。

従来「きりかけ」は秘事のひとつとされてきたので、管見に入らない秘説が存在していたのかもしれないが、それにしても、「床子座」を「床子床」、「陣座」を「陳座」、「紫明抄」を「紫系抄」と誤つてるところなどをみるに、黒川本の頭注は書承ではなく、聞書であった可能性も考えられるようである。

①の「古六帖」は3段の和歌

かたかけの舟にやのれるしらなみのさはぐときのみおもひいつるきみ

の頭注にある。この歌の解釈を『鈔』では

かたかけの舟にやのれるの哥 汀の舟也 白浪にさはかれ出るをたとへてさはくときのみおもひいつる君と也
下照姫の哥にいしかはかたふちかたふちにあみはりわたしとあり かたかけはかたふちに也 此方のさまを
相聞といふと也

と注記した。「かたかけの舟」を「汀の舟」の義とし、「さはく」の序詞となる由来を説明したようである。一方黒川本では『鈔』注を探ることなく、次の a b を記している。

a 哥の心ハ片帆かけて行舟也 片帆かけて行舟の時ハすむ 又の義瀉陰也 其時ハ濁也 瀉陰ハ塩の深く浪の立
處也

b 古六帖 汐瀬漕かたかけ小舟なかほともいたくな侘びそ梶とり行かん

此哥にて思合すれば片かけは片帆にかけたる舟也なるへし 然者けの字清て可然也

a では「片帆かけて行舟」の義であると異説をたてている。『鈔』注を採用しなかったのはそのためであろうか。「又の義瀉陰也」以降では「汀の舟」説を紹介してはいるものの、具体的な記述内容は『鈔』とは全く別のものである。

続く b は a とは筆が異なるようだが、「片帆かけて行舟」の義とする点では同様。新たに、『古今六帖』からの証歌を見つけたし、また瀉陰の時は「かたかけ」と濁ると指摘した a を承けて「片帆かけて」の意味だから清音で読むべきだともしている。a を支持・援護した追加注とみてよいだろう。

ちなみに、現行の黒川本には和歌本文の「かたかけ」に清濁両用の記号が振られている。はじめは「げ」としたものの、こうした独自注を受けて「け」と直したものであろう。注釈を加えながら、その結果を承けて、物語本文にも再度の手を加えていった様子が窺えるようである。

このように黒川本は物語中に引かれた和歌の出典や集付けについて、ひとつひとつ熱心に調べ上げている。和歌関係の資料は充実し、かつ得意分野だったようである。

【例三】さきに聞書による可能性が強い例を紹介したが、黒川本の独自注のなかには明らかに、第三者から講釈を受けた時の聞書かと思われるものもある。例えば次の七例。

①吉源釈義云花山院ノ御作也 題号ノ心ハ大和哥物語ト云心ナリ（巻頭注）

②吉源今案に五郎の方へ伊豫の子来んと云によりて待てありければ御息所の方へ参る程に今宵ハ参間敷と重而いひおこしたる詞と聞給てはいか、（65段「こんといひければ御息所の御もとに内へなんまいると云をこせたりければ」の頭注）

③吉 紅ヲフリ出シテ物ヲ染ルゴトクニ鹿ノ鳴バ木々モ紅葉等イクラハカリノ紅ソトヨメリ（127段「しかのねはいくらばかりのくれなひぞふりいづるからにやまのそむらん」傍注）

④吉傳 召仕ノ人ノコト也（143段「かみのめしうとにてありけるを」傍注）

⑤抱子一ノミコナレハ女一ノ御子トイヘリ 吉傳（147段「女になり給て女一のみこ」傍注）

⑥世ノわたらひ也 吉傳（148段「年比わたらえなとも」の傍注）

⑦此段ニ返シハ不知トアル程ニ此哥ノ後人ノ書添タルナルヘシ 吉傳（148段段末歌の傍注）

「吉源釈義」「吉源今案」「吉」「吉傳」など呼び方はさまざまだが、「吉」の文字は共通している。おそらくは同一人物であらう。

このうち②と⑥は『鈔』注の引用のあとに記されたもので、内容は、それぞれ『鈔』注と対立するものとなっている。

ただし②の場合は、黒川本の朱筆者がこの「吉源今案」を抹消し、「五郎伊与の子の方へ也」として、再び『鈔』説に戻ったようである。

次に、もう一人の人物による講釈聞書の例を示す。

⑧ 垣濟説 此風吹古今六帖二有之 然レハ此哥ヨリ有テ嘶ニ云傳ヒシヲ伊勢ニハ業平ト書爰ニハ葛城ノ王ト有となん古今などにもかの哥載たり (149段「風ふけはおきつしら浪」の和歌頭注)

⑨ 垣濟説是吉 承香殿はいとちかきほとになん 承香殿ハ仁寿殿と常寧殿の間也 諸家ちかかるへからす 承香殿の女御の御里小松殿と陽成院との事成へし 小松殿ハ大炊御門の北室町の西 光孝天皇御誕生の所也 故ニ号小松帝 (139段「承香殿」の頭注)

⑩ 垣濟説よし 陽成院ハ大炊御門南西ノ洞院ノ西 陽成院御誕生の所也 小松殿と陽成院ハ中一町也 女御御里におハす時元良親王陽成院におハしますによりいと近きほとになんと成へし 女御の母后ハ中野親王の女也 元良親王ノ母ハ藤原遠長か女也 或本に承香殿と染殿はいとちかきほととなりとあり 染殿ハ忠仁公の家正親町の北京極の西二町也 元良親王の家にあらず 承香殿小松殿にも遠し (139段「陽成院」の頭注)

このうち、⑨と⑩は、ともに『鈔』からの引用注(「承香殿ハ：故ニ号小松帝」「陽成院ハ：小松殿にも遠し」)に対する肩付きとして記されたものである。「垣濟説同」ではなく、「垣濟説是吉」「垣濟説よし」とある点に注意したい。「同」ならば、垣濟の説もたまたま『鈔』と同じであったとしてすまされるのだが、「吉」あるいは「よし」とあるので、垣濟が『鈔』のこの注を評価し、支持したものと受け取れよう。垣濟もまた『鈔』の一本を所持しており、それを講釈の場で引いたものか、あるいは黒川本施注者の側から『鈔』注を紹介し、垣濟の意見を聞いたものか。細かな経緯は不明だが、

『鈔』注をめぐって第三者とのやり取りがあったらしいことは、その享受史を考察する上でも興味深い事例といえる。

【例四】黒川本では、こうして書き入れられた独自注に対しても、吟味を加えた記述がある。例えば65段、後半部分の物語本文を引く。

又ゆきのふる夜きたりけるを　ものはいひてよふけぬ　かへり給ね　といひければかへりけるほとに　戸をさしてあけさりければ

われはさはゆきふるそらに消ねとやたちかへれともあけぬいた戸は

となんいひ（て）　あたりける　かく哥もよみあはせにいひゐたれば　いかにせましと思ひてのそきて見れば　かほこそ（猶）いとにくげなり　しかとなんかたりしかと

この本文の解釈をめぐり、当時はいくつかの説が交差していたようで、主な問題点をまとめると次のようになる。

①「かへり給ね」とあるのは〈自宅に帰りなさいと女が〉言ったのか、〈物越に会話を交したこの場所へ戻つてと、男ないし女が言った〉という意味なのか。

②「戸をさして」とあるのは〈帰路に就こうとした途中の戸、例えば門などの戸を閉めた〉という意味なのか、〈会話を交した場所へもどる戸〉なのか。

③「いかにせましと思ひてのそきて見」たのは、〈女〉なのか〈男〉なのか。

④その結果、「かほこそ猶いとにくげなりしか」あるいは逆に「にくげなかりし」とあったのは〈男の顔か〉〈女の顔か〉。

⑤「かたりしか」とある主語は〈男〉か〈女〉か。

独自注では、こうした諸説を紹介し、時に批判しているのだが、その前にまず『鈔』注を確認しておこう。このくんだり

に関する注は次の四項目である。

かへり給ね 追り立かへりたるを戸をさしてあはすと也

われはさはの哥 我をかくして雪の空にきえよとするわさかと也

かはなとこそ猶いとにくけなりし 哥のよからぬよりも猶すかたはにくいけしたりとなり

きゝしかと かたりをきしかとなといふ文章也

「立かへり」とあることから、『鈔』では、①②はこの場所へ戻つてと女が言い、にもかかわらず、その戸を閉めた。③④は女が男の顔を見て、と解釈していたようである。

黒川本では、こうした『鈔』注を引く一方で、次に記すa～eの独自注を新たに加えている。

a 夜更ぬるによりてかへらんとおひけるにかへり給ねと女を呼かへすと見てよし（「かへり給ね」傍注）

b 呼かへしてあげざると見てよし 末にのぞきて見れはと有也（「戸をさして」傍注）

c 戸をさしてといふ事 判本の抄には帰る道の戸をさしたると有 此説にてハ哥もきこえす 末にのぞきて見れはとあるに不首尾也（同、頭注）

d 女の情けもあらんかと也 又女の心にいか、せんと思ひて戸の内より五郎をのそきたると云説モ有（「いかにせましと思へて」傍注）

e 五郎の語りし也 又伊与の子のかたりしと云説モ有也（「かたりしかと」左傍注）

①と照応するaでは、（一度は帰れと言ったものの、この場所へ戻つてと男が女を呼び返した）としたようである。②と照応するcでは「判本の抄」（『拾穂抄』）であろう。「帰るへき道の戸をさしたるへし」とある（説を批判。③④と照応するdでは『鈔』説以外の解釈も紹介、⑤と照応するeでも両説を紹介している）。

そして注意したいのは、a eの独自注に対して、黒川本では更に朱筆で次のように加筆している点である。すなわちaに対しては「伊与の子云タル也」と独自注を否定。eに対しては「伊与の子のかたりしと云説」の方に「此注よし」とし、のみならず物語本文「いとにくげなりしか」を「いとにくげなりしか」と訂正、文意を逆転させている。

以上のことから、独自注が施された後も検証は続き、黒川本が現行の形におさまるまでには、朱墨それぞれの筆による書き入れが数次にわたって行われていたことが窺われよう。

以上、独自注に関する分析結果をまとめると

①『鈔』欠落章段への加注はごく簡単なものだが、なかには『拾穂抄』『首書』等を参照したものもあったらしいこと。
②書承あるいは聞書といったかたちで、多彩な情報源からもたらされたものであったらしいこと。なかでも多いのは和歌・人物・有職故実関連の記事であること。

③講釈時の聞書を書き入れたかとみられる例もあり、そのおり『鈔』注が持ち出されることもあったらしいこと。

④独自注に対しても、数次にわたっての書き入れが施されていること。
となる。

黒川本は『鈔』をベースとしながらも、それだけに収まることなく、次々に自己増殖を重ねていったようである。その遠因は物語本文を校訂本文とし、注記を首書形式に改めたあたりから発しているのかもしれない。純粹な転写本ではないが、『鈔』がどのように享受されていたかを極めて具体的に物語る好資料であり、いうなれば『鈔』のなかの後期増補本系の一本として、位置づけることができるように思う。